

J.H. ステイプ 編著
 社本雅信 監訳／日本コンラッド協会 訳

『コンラッド文学案内』



本物の面白さを損なわぬ具体の横溢

ある作家への偏愛を「普通に好む」という程度に和らげるために、発表はさておき、自分で小説を書いてみるという方法がある。すると、対象を言葉ですくいとるといふ、第一のいわば避けがたい嘘に加担した上、作中人物の生殺与奪を気ままに変えるという第二の嘘にも平気で加担できるようになるので、敬愛していた作家とてもさぞやと思ひ至り、小説の読み方が冷静になる。

第二の嘘がやりきれないという研究者は、作品にたとえば歴史的テーマを追い求め、作品世界から早々に出て、複数作品、複数作家をからめとり、そしてやがて文学から出て行く。論文の数は貯まるかもしれない。

嘘と承知で小説を買い求め、作品の扉を開き、作品を読み、テレビドラマのエンディングの断り書きよろしく「これはすべ

てフィクション」と了解して作品を気持ちよく閉じるという読者は、入口と出口の嘘の扉の間に本物ありとし、本物の蓄積を楽しむ。小説は 5W1H を執拗にまことしやかに描くが、読了してみれば、そうした要素のひとつ、ふたつ、三つが落ちたあげくに本物が残る。

コンラッドが、いくら古さを増しても、本物らしさを漂わせているのは、特に日本の英文学読者から見れば、イギリスの作家であると同時に外の世界からイギリスに入った作家であるため、これまでかなりわかりにくく、そのため、具体的なものが伝搬の過程でそぎ落とされ、いきなり「闇」とか「放浪」といったこの地域からも参加可能なテーマに読者を誘うところがあるからだ。ナイポールや、ドイツからイギリスに渡った、その突然の死の惜しまれるゼーバルトにもそんなところがある。ナイポールやゼーバルトやチャトウィンがどこを実際に放浪しても、読者はかれらの文字のなかを放浪しているに過ぎないのかもしれない。

原著がコンパニオンの語を含みながらも大部の研究書として貴重な本書は、上記に述べた「具体的なもの」の宝庫で、コンラッドのテキストにいきなり本物ありと狂喜した読者にも、本物に辿り着くには地道な具体（「案内」）の確認が必要と説く読者にも、面白くてためになる。「書籍案内」（山本卓訳）はそのまま世界のコンラッド受容史。ピサ大学のコレクションについての記述など、ここは重箱の隅に行けば行くほど、面白くなるから不思議だ。「索引」と「重要文芸用語解説」も、絞り込まれた記述がかえって研究意欲はもちろんのこと、コンラッド作品再読への意欲を刺激する。第3章から第7章までは海外研究者の作品論を超えた作品論で、壮大という意味では対象です

に得をしている『ノストローモ』(エロイーズ・ニャップ・ヘイ／中井義一訳)論がよい。小説の入口と出口が気にかかるというなら第9章「コンラッドの語り」(ヤコブ・ルーテ／宮川美佐子訳)が、十九世紀というのはある程度まで輪郭がつかみやすく見えるものの、そこと現代の間にあるモダニズムのわかりにくさに戸惑うというなら第11章「コンラッドとモダニズム」(ケネス・グレアム／山本卓訳)が、現代文学はどのあたりからわかりにくくなったのかと訝るのであれば第12章「コンラッドが与えた影響」(ジーン・M・ムーア／西村隆訳)がそれぞれ一定の方向性を示してくれよう。特に第12章冒頭でコンラッド影響下の作家にボルヘス、ナイポール、カルヴィーノといった名前を見いだすとき、それぞれが読者にとって埋没するに十分な広さを持つ世界を構築しているなか、かれらの源流のひとつがコンラッドと確認して(作品を読んでいけば感じ取れるとはいえ)、さまざまな流れの合流地点踏査には、本書のような具体の集積の日本への紹介が、斯界の諸事情とほうらはらに、ますます重要性を増すとの認識を新たにする。そうした過去のいくつもの合流地点への関心こそが、未来のいくつもの合流地点形成を促し、次の文学を産む土壌たりうる。いきなり本物、本質に迫ったと慌てるのは早い。「具体的なもの」を踏まえずしての本物、本質の風化こそ、むしろ怖い。(研究社、2012年5月、A5判 iv+474頁、4,000円)

—— 梅 正行 (中京大学教授)